

要旨

抗核抗体は膠原病における全身性自己免疫の代表的現象であり、腎炎など病態形成への関与も指摘されている。その機序には不明な点が多く、動物モデルの有用性が限定的であることも研究の障害となっている。この解決のため、本研究は、制御性 T 細胞を欠いた CD4⁺T 細胞のヌードマウスへの移入が、全例に早期より長期間持続する高抗体価の抗核抗体を誘導し、容易に誘導環境を変更できる有用な系であることを見出した。さらに本系を用いて、リンパ球減少下では末梢リンパ球が増殖し再構築する生理的な homeostatic proliferation という機構が、germinal center 形成と follicular helper T 細胞の誘導とともに抗核抗体誘導能を内在しており、その危険を制御性 T 細胞が抑制していることを明らかにした。